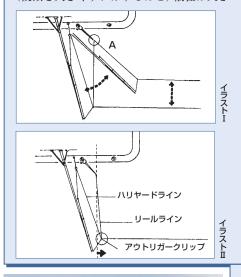


ロッドホルダーに収めたロッドとアウトリガーポールとの位置関係

●トローリングの場合

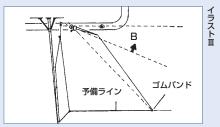
アウトリガークリップなどを使用してト ローリングを行なう場合、ストライクした 後に、ラインがスムーズに出ることが重要 です。また、魚がかかった際に、ラインの弛 みをできるだけ少なくするために、ロッド トップA点からアウトリガークリップを経 て、ルアーとつながるラインを、できるだけ 直線的に構成したいものです。そうするこ とで風や波がある場合、ロッドからのライ ンがアウトリガーポールに絡まることも防 ぎます。ただし、アウトリガーを後傾させる ことで、アウトリガーが持つ本来のメリット (ルアーとルアーの間隔を広くできるなど の点)が犠牲になり、角度をとれば取るほど (後傾を大きくすればするほど) 犠牲は大き



くなります(イラストI)。

そこで、実際の取り付けを考えてみるこ とにします。ロッドホルダーにロッドをセッ トし、そのロッドトップA点からボート に対して垂直に見た線上より、アウトリ ガー・クリップの位置が後方にくるように ポールをセットするのが理想とされていま す(イラストⅡ) この基準をクリアーすれば、 アウトリガーポールに魚がヒットした場 合、クリップにラインテンションがかかり、 アウトリガーポールは弓なりに曲がるので ヒットの瞬間は、さらにクリップ位置が後 ろへ移動するので、良いアングルを得るこ とになります。

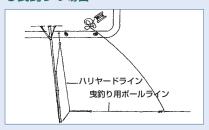
一方、アウトリガークリップを使用せず、 ゴムバンドを使ってラインを流す場合は、 (イラストⅢ) のような予備ラインをセット することで、スムーズなラインの角度が得 られます。こうすればアウトリガーの長さ も有効に使え、そのメリットを最大限に利 用できるわけです。ただし、ルアーや魚のサ イズにより、ゴムバンドの強さの選択が必



通常アウトリガー用のロッドホルダーの角度は上図のよ うにBの位置以内にすることが望ましく、魚の力により 一気に出るラインの抵抗を考えると、できるだけロッド トップからラインの出る方向が一直線になる方がライン

要になります。またこのシステムでは、一度 セットした後のラインの出し入れ時に、一 回ずつゴムバンドをセットし直さなければ ならないという面倒な部分があります。

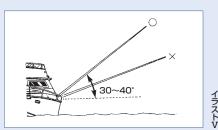
●曳釣りの場合



予備ラインをセットして行なうトローリ ングと同様、曳釣り用ポールラインを使用 すれば、曳釣りを行なう場合アウトリガー ポールのトップの位置がどこにあってもあ まり問題にはなりません。しかし、アウト リガーシステムが長ければ長いほど、効果 が得られる点を考えると、できるだけ外に 出し、ポールのもつ反発力も十分に得られ るようにしたほうが良いはずです。一般的 に曳釣りの場合は、操船者がアウトリガー ポールのトップを見て魚がかかっているの を知ることが多いので、運転席から見やす いポール位置が良いとされています。(イ **ラストⅣ**) では、曳釣り用ポールラインを ハリヤードラインに接続する形で使用し、 トローリング (スポーツフィッシング) に すぐに切り替えられるように、セットされ ています。専業になると、少しでもトラブ ル率を減少させるため、ポールのトップに 直接セットする場合が多いようです。

FRPロッドを垂直に立てる事で水面からの高さをかせぎ ます。弾力性に高さが加わるためダボやバクダン、ビシ ヤマを曳くことができます。

波や風がある場合、ボートはローリング します。そのローリングの角度が25度を超 えると大変危険でフィッシングを楽しむど ころではなくボート自体が危険にさらされ ます。アウトリガーポールは、長ければ長い ほど遠くに曳具が曳けるので有効なのです が、30度以下の角度でセッティングするこ とは、ポールトップが水中に突っ込むなど の危険性を考えて避けなければなりませ ん。また、角度を決定する他の要素としては、 曳くルアーやヒコーキ、バクダンといった 曳釣り用具があり、用具によって角度が多 少異なります。これらに関しては、いろいろ な経験に基づく理論も多いので一概には言



えませんが、フレキシブルに角度を変化さ

■海面に対するアウトリガーポールの角度

せられるシステムを導入することで対応す ることができます。したがって30~40度と いうセット角度を目安として、フィッティ ングするのがよいということになります。

5